

國學院大學學術情報リポジトリ

幕末における国学・仏教と国家：
平田国学の仏教批判と仏教からの反批判

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 遠藤, 潤 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001424

幕末における国学・仏教と国家

—平田国学の仏教批判と仏教からの反批判—

遠藤潤

論文要旨

平田篤胤による仏教批判書には『出定笑語』(『出定笑語講本』)、『悟道弁』、『出定笑語附録』などがあり、最もよく知られているのは『出定笑語』であろう。書物成立のプロセスを具体的に検討すると、執筆は比較的近い時期に行われ、いずれも文化年間に草稿として成立したが、版本として気吹舎が出版したのは、文久二年(一八六二)の『悟道弁』と『出定笑語附録』が先行している。篤胤の執筆の背景には、当時の江戸で法華宗と一向宗が活発だったことがあるが、その時点から一定

の期間を経過しての出版の際には、また執筆時点とは異なる理由があった。具体的には尊皇に関わる政治状況を判断しつつ仏教批判書の出版に踏み切るに至ったのである。この出版は仏教界に大きな衝撃を与え、仏教からの反論書があいついで成立し、写本などの形で流布した。各宗によってその内容は多様な面を含んでいるが、仏教批判への反論には、国家安泰のため仏教の役割を主張するなど、共通する性質もみられる。

はじめに

幕末維新期の日本の宗教は国家なるものをどのように意識しながら、自分たちの思考を深めていったのだろうか。ここでは、平田国学と仏教という、やや小さなテーマからこの問題を考え直してみたい。

この時期の国家と宗教の関係を考えるときに、その大きな変化を濃縮して象徴するできごととして神仏分離や廢仏毀釈がとりあげら

れることは多い。幕府の保護のもとにあった仏教が、神道を重視する明治政府の新しい諸政策によって圧迫される。その背景には、平田篤胤をはじめとする国学者・神職らによる排仏思想があつて大きな影響を及ぼしていた。神仏分離を語るときの一般的前提は、おおよそこのようなところにあるのではないだろうか。そこからは、平田篤胤（一七七六—一八四三）の思想が神仏分離や廃仏毀釈にどのように反映しているのか、という問題設定が生じる。

しかしながら、平田篤胤が活動した十九世紀初頭と明治初年の宗教政策のあいだには数十年の時間が経過している。この時間の経過のなかには、さまざまな歴史的プロセスが畳み込まれている。また、能動的に動いたさまざまな存在があり、受動的に語られがちな仏教・寺院・僧侶についても、実際は能動的で複雑な活動があつた。これらは大きな問題群をなしているが、この論文では、平田国学による仏教批判とそれに対する反批判に光をあてたい。

近年、平田国学に関しては、平田篤胤の学塾である気吹舎の蔵書のほとんどを継承した平田神社蔵書の網羅的な調査が完了してその全貌について明らかにされるとともに、それにもとづいた、篤胤および気吹舎の活動についての見直しが進められている。そのなかで特に明らかになってきたのは、気吹舎の出版活動の具体的なありようである。気吹舎の出版活動は、日本における組織的な書籍出版の早期の例であるばかりでなく、化政期から明治時代にいたるまでの時期における、平田国学の組織的な活動の重要な部分をなしている。ここでは、書籍が出版されること、書籍の出版のために人々が組織をつくること、それが思想の運動を形成していた。

「書物の社会史」で知られるロジェ・シャルチエ (Roger Chartier) は^①のよう述べる。

「作者は何をなさそうと、書物を書かない。書物はまったく書かれない。書物は写字生その他の職人によって、職工その他の技術者によって、印刷機その他の機会によって作られるのだ」(Roger E. Stodard)。この指摘は、これから筆者が提案しようと思う第三の転換への、格好の導入となるだろう。テキストは物質性をいっさい剥がれてもそれ自体で存在する、という表象を文学自体が作り上げ、書物の歴史のなかの最も数量史的な研究がこれを引き継いできた。このような表象に逆らつて、テキストを読ませる(または聴かせる)支持材料なしにはテキストは存在しない、したがつて何であれ書かれたものの理解は、どんな場合でも、それ

が読者に達する際にまとう形態に部分的に依存するのだと、改めて述べる必要がある。エクリチュールの戦略と作者の意図に属する装置の総体、そして刊行する側の決断や工房の制約に起因する装置の総体、これら二群の装置を区別することの必要性が、ここから出てくる。

作者が書物を書かないというのは事実であり、彼らはテキストを書くのであって、それらが手で書かれたり、版刻されたり、印刷されたりして（今日ではコンピュータで処理されたりして）書かれたモノとなるのだ。このズレがまさに、意味が構築される空間である。⁽³⁾」

ここでは、平田国学の排仏論とそれに対する仏教者の反批判をとりあげて検討するが、その際に思想内容の分析を行うのは当然として、その前提として、気吹舎の書物の流通のあり方の考察を加えたい。すなわち、テキスト・書物・読書という三項の枠組みのなか、「エクリチュールの戦略と作者の意図に属する装置の総体」と「刊行する側の決断や工房の制約に起因する装置の総体」の区別を意識しつつ、テキストから書物までの具体的プロセスに注目して考察を進めたい。

一 十九世紀初頭の日本社会における平田篤胤の位置

平田篤胤が十九世紀初頭に自らの思想を形成し、それがやがて少なくない人々に受け入れられていった現象をどのように理解したらよいのか。宮地正人は、それをこの時期の特異な性格、「鎖国成立以来、日本が初めて世界史と正面から対決しなければならぬ異常な時期」という問題状況から位置づける。⁽⁴⁾ 対外的な危機意識を強い動機として、篤胤の学問が形成されたところであるのであり、「対外的危機に対決しうる主体側の国家・国土意識のあり方と主体側の魂の行方への確信を形づくるために『靈能真柱』を著したとする。私もおおよそこのとらえ方を受け入れたい。

篤胤の思想がキリスト教と類似しているという問題についても、この視点からとらえかえすことができる。

篤胤の思想形成にキリスト教の影響が見られることは、早くは村岡典嗣による指摘がある⁽⁵⁾。村岡は「服部中庸の三大考を承けて、彼が夙に靈の真柱に述べ、更に多少の補正を試みた宇宙開闢説は暫く之を措き、神学的思想として寧ろ一層主なるものは、左の主宰神及び来世観の思想である。」として、前者の主宰神の思想については、(一)天御中主神を「宇宙の万物を悉く主宰り給ふ神」、産靈神を「天地世界を創造し、人種万物を生成し、又人間に至善の靈性を賦与せる祖神」としたこと、(二)大国主神について「幽世を支配し、善悪を審判する神」と理解したことを指摘し、後者が優越的位置におかれていと論じた。そして「本教外篇」の内容分析を通じて、これらの特徴がキリスト教に由来していることを指摘した。それは、篤胤の思索における来世の思想への要求の高まりが重要な要因である、と村岡はとらえている。

これに対して宮地は「…篤胤は、太陽と地球と月の形成を地動説的に解釈した上で、キリスト教的世界創造神話と旧約聖書の歴史展開を意識しつつ、天御中主神を創造主とするきわめて首尾一貫した神道神学をつくりあげるのである。」⁽⁶⁾と論じる。村岡において宇宙開闢説と主宰神が区別してとりあげられていたのに対して、宮地は両者を一貫した神道神学の構築という視点でとらえているのである。キリスト教を意識した「神道神学」はどのように展開しているのか。ここでは、『靈能真柱』における「天地創造」をめぐる論理展開について追ってみよう⁽⁷⁾。

『靈能真柱』は服部中庸『三大考』を参考にしながら著された。中庸はその著書において、宣長『古事記伝』での万物の生成をムスビのはたらきととらえる理解をふまえつつ、古事記に出てくる天と地と泉について、それぞれ太陽・地球・月と同一ととらえてその生成過程を図とともに説明した。篤胤は『三大考』と自分の考えを対置し、相違する点を補正しながら『靈能真柱』を著した。

同書では冒頭に「大倭心を太く高く固めまく欲するには、その靈の行方の安定を知ることなも先なりける」と記しており、「『靈能真柱』一丁ウ」、これまで筆者を含めて多くの論者が靈魂の行方を知ることと「大倭心」を固めることの結びつきをこの文言にのみ依拠して理解してきた。

しかしながら『靈能真柱』における地が固まるまでの記述を丁寧に見ると、そこには神と国家と靈魂を神話的に結びつける論理が見いだされる。概略を説明するならば次のようになる⁽⁸⁾。

イザナギとイザナミは天つ神から賜った矛によって国土をかきさぐってオノコ口島につきたて、そのホコが国の御柱となった。流動的で漂っていた大地はホコを立てたことによって固まったのであり、このホコの地であるすめら御国は国土の「元本」であり、オノコ口島はミハシラ（御柱）である地なのである。ホコはタマ（玉）で飾っているが、それは五柱の天つ神、なかでもムスビのタマ（霊）をイザナミ・イザナミに依らせ榮えさせて、国土をつとめさせるためである。ホコにタマ（玉）が飾ってあるのは、このホコを中心の固め柱にするように、とのお考えあつてのことだ。タマ（玉）を与えることは、ミタマ（御霊）の力を授けることを意味している。人のタマ（靈魂）も神が分け与えたのでタマという。

このように、玉と魂がタマという音で通じているという点も論拠にしながら、玉を与えることによってムスビの神からイザナギ・イザナミへ、また一般の人々にもタマの力が与えられると篤胤は説明するのである。特に、天つ神（なかでもムスビ）とイザナギ・イザナミをタマ（玉＝霊）で確かに結びつけた点に、この説明の特徴はある。ムスビの霊（「神徳」ともいいかえられるか）の力がイザナギ・イザナミにも与えられ、それが玉の飾りによってホコにも伝えられ、そして世界の大地の中心である柱になる、という世界生成の理解がここにはある。ムスビのタマの力が貫徹していることをもって、日本の国土がすぐれていることを基礎づけようとするのである。

このように篤胤は、天地のあり方を神のタマから基礎づける。これは、キリスト教が天地創造を神から説明づけているのを参照しながら、日本の神々によって世界を包括的に説明づけようとする試みであった。そして、タマという象徴的なモノが神話の各場面で重要な役割を果たしていると考えることによって、国土や人をはじめとしたあらゆるものにムスビのタマの力（霊力）が行き渡っていると考えるのである。本書が「タマ（霊）のミハシラ（御柱）」という題名をもつゆえんはここにある。⁹⁾

仏教との関係でいえば、『靈能真柱』はこれまでもつぱら死後の靈魂の行方をめぐって論じられてきた。すなわち、極楽浄土をひとつの典型とするような仏教の死後理解に対して、篤胤が独自の死後理解を主張したという理解である。しかしながら、ここでみたように国土を日本の神から位置づけるといふ論理についていうならば、これは中世以来の仏教思想を不可避的に前提とした神国思想に対置されるものである。

二 篤胤の仏教関係書・批判書

『靈能真柱』は、篤胤が神とコスモロジーの関係について基本的枠組みを構築した書物であったが、そこでは仏教についての彼の考えが全面的に展開されたわけではなかった。ここでは、篤胤の仏教関係書を概観したうえで、そこでの仏教批判と社会における広がりについて考察したい。

篤胤の仏教批判の前提は、著名な仏教批判書である富永仲基（一七一五―四六）の『出定後語』（延享元年（一七四四）成立、延享二年刊）によって与えられている。『出定後語』の記述によれば、篤胤は享和元年（一八〇二）以前に、本居宣長『玉勝間』を読み、その記述から仲基の『出定後語』の存在を知った。宣長の門人で京都の書肆でもあった城戸千楯（一七七八―一八四五）に同書の搜索を依頼するが、刊行から半世紀も経過しており搜索は難航する。そのうちに、大坂の本屋で版木が発見されて再版されることになり、享和二年に再版されて篤胤もこれを購入した。また、その後、同じく仏教批判書である服部天游『赤保々』も入手した^⑩。特に、仲基の加上説は、後述するように、一方で仏教批判の根拠として、他方で仏典から釈迦以前の「古伝」抽出の方法として、篤胤にとって重要な役割を果たすことになる。

(一) 仏教に関する篤胤の講説と著述

はじめに、主要な仏教関係書の内容についてふれておきたい。

『出定後語講本』（『出定後語』）は、篤胤の著書のなかでおそらく最も有名な仏教批判書で、仲基や天游らを援用しながら論を展開している。当初、「仏道大意」という名称であった。『悟道弁』は、禅の悟りについて、人間にとつて無意味なものであると論じる書である。『出定後語附録』は三巻からなる書物で、一之下（巻）以下には「神敵二宗論」の別名がついており、この部分では真宗と日蓮宗をとりあげて批判している。『古今妖魅考』^⑪は、妖怪や魔物を天狗というカテゴリーでとらえ、林羅山『本朝神社考』にみられる天狗に関する記述をもとにしながら、そのありさまを論じる。基本的には、墮落した仏教者と結びつけて天狗を理解している。『今昔物語集』

をはじめ、数多くの典拠をあげて具体的に論じている点に特徴がある。

『印度蔵志』¹²は、仏典研究書である。篤胤が基本的な仏教のテキストを選定し、その解説をするという形式で記されている。インドに残る「古伝」と仏典の妄説を「古学の眼」で区別することが執筆の目的である。¹³ここで篤胤が活用しているのが仲基の加上説である。加上説によってインドの「古伝」と妄説を区別し、「古伝」のほうは日本における「古伝」を補足するものとされた。¹⁴

これらの書物について、テキストの成立から書物にいたるまでのプロセスについて検討したい。気吹舎の書物には「講本」（あるいは「講釈本」と呼ばれる一群の書籍がある。講説の筆記にもとづいて成立した書物である。先にあげた書物のなかでは、『出定笑語講本』、『悟道弁』、『出定笑語附録』がこれにあたる。篤胤は先にあげた仲基らの本を入手したのち享和四年に「真菅乃屋」なる塾を開いていたが（文化十三年に「気吹舎」に改名）、文化六年（一八〇九）京橋山下町に転居し、古道の講説を始めた。この年、のちに「大意」の名をつけて出版される一連の書物のもととなった講説が行われ、「仏道大意」（のち『出定笑語講本』）のもととなった講説もそれに含まれる。『悟道弁』のもととなる講説は文化八年、『出定笑語附録』のもととなるものは文化十年と比較的近い時期に行われている。

ここで注意をおきたいのは、この時期の篤胤の塾の規模である。門人の記録である「誓詞帳」と「門人姓名録」によれば、古道の講説を始めた文化六年までの入門者は十八名であった。¹⁵もちろん講説の場には門人以外の参加も少なくなかったであろうが、のちの気吹舎の大規模な門人組織をこの段階について想定することは誤解を招くものであり、これらの講説は比較的限られた人々に対して語られたことばであった。のちに書物の形になったときにみられる篤胤の通俗的な語り口は、こうした場の雰囲気によるところが大きい。また、当初は仏教に対してその組織全体を正面から批判をする意図をもって語られたものでなかったことにも注意すべきである。

なぜこの時期に篤胤は仏教批判を行ったのか。特に日蓮宗と真宗については集中的な批判を行っている。篤胤は「扱二宗論トハ、一向宗ト、日蓮宗トノ論弁ノ事ダガ、此二宗ホド、吾ガ神ノ道ノ妨害ヲ為ス者ハ无イ事故ニ止ム事ヲ得ズ、弁駁イタス事デゴザル。」¹⁶『出定笑語附録』、『新修平田篤胤全集』十、四四八頁」と述べる。この二宗が対象になった理由について、芳賀登は「江戸における平田門の浸透と大きく関わっていると考えている」とするが、その根拠は明確には示していない。¹⁷

ここでは、篤胤活動当時の仏教の状況を考えてみたい。山口啓二は、近世の仏教思想に関する大桑斉の論を仏教と民衆の関わりとい

う視点から整理しなおしてつぎのように説明している。¹⁸⁾ すなわち、十七世紀中頃から在地で寺院が展開・定着してゆくなか、民衆を仏教思想の中心にすえた仏教復興の動向がおこり十八世紀になって本格的な復興となるが、十八世紀中期以降、商品生産の発展によって階層分化が生じて社会的矛盾が深まり、それまでの民衆救済の理念も変質せざるを得なかった。

十八世紀後半から十九世紀にかけて、儒者を中心に排仏論がおこってくる。その原因として僧侶の墮落が指摘されるが、その内実は右のような仏教の変容だったと考えられるのである。

ただし、これはあくまでも大きな状況を説明したにすぎない。篤胤にとって眼前の二宗が敵とうつつたのはなぜか。神祇をめぐる問題以外にいくつかの可能性を考えたい。

日塔和彦は『御府内寺社備考』の分析を通じて、文政年間（一八一八―三〇）の江戸における各宗の地域的特性・階層的特性を明らかにしている。¹⁹⁾ それによると寺院の規模としては、天台宗と真言宗が拝領地が多い大規模寺院が多いのに対して、真宗と日蓮宗は小規模寺院の比率が高く、年貢地や借地が多くみられる。それはこれら二宗が町人を対象とする庶民的性格を帯びていたことを示すという。篤胤が町人地に住み、初期の門人には町人が多くみられることからすれば、こうした点で篤胤が真宗・日蓮宗と対抗関係にあったことも推測しうる。また北村行遠が分析したように、日蓮宗についてみれば、十九世紀前半は江戸の日蓮宗講中が最盛期を迎えており、²⁰⁾ このことも影響していた可能性がある。

高木豊は、篤胤のこの講説を『出定笑語附録』という本の形にまとめたのが下総の門人野口音春・平山光長であったことに注目している。²¹⁾ 高木によれば、下総は親鸞の時代から門徒が形成されていた地域であるとともに、日蓮門徒が多く分布している。と同時に、平田国学需要の最大の基盤でもあったのであり、当地の気吹舎門人にとって篤胤の二宗批判の講説の集成が必要なことだったと推測している。確かに序では『出定笑語』にもれた記事を集積したと書かれているが、一方で「神敵二宗論」の部分は、もともとまとまった講説がなされたようにも読める。このまとめりが篤胤の意向によるものなのか、下総門人の意向によるのかという点は今後の検討課題である。

(二) 仏教関係書の出版

さて、ここで見てきたような篤胤の講説は、門人たちの筆記をもとに書物へと編成される。「仏道大意講本」は文化八年（一八一二）に成立している。のち『出定笑語』の冒頭は「サテ是ハ出定笑語ノ大意テ、演説致ス事ハ」と始まる。これを見るかぎり「出定笑語」なる著作が別にあつて、それをわかりやすく講説するという設定と推測される。現存する、未完成の「出定笑語原本」（翻刻は『新修平田篤胤全集』七巻、所収）がそれにあたるとも考えられるが、田中義能は同書を文化十年頃の著作と推測しており年代的に齟齬があるなど、確定はできない。『悟道弁』は文化九年に清書がなされ、『出定笑語附録』の序は文化十四年に用意された。

しかしながら、これらはすんなりと出版物に展開はしなかつた。気吹舎では、テキストが書物となる過程においていくつかの選別があつた。

そもそもこの時期の書物は、必ずしも出版物のかたちで頒布されるものではなかつた。書籍目録に掲載されている書物であっても、一部分は資金を得て出版することが可能になるが、それなりの部分は筆工らの制作する写本によって流通した。気吹舎の場合、注文を受けて篤胤の養子である鏡胤がそれを差配した。⁽²²⁾

また、気吹舎の書物には「内書／外書」の区別があつた。この区別について、生田万は天保五年（一八三四）に作成した篤胤の著述目録に付した序のなかで、「蓋将ニ桑梓ニ刻ミテ、以テ之ヲ天下ニ公ニセムトスル者數十部、謹テ之ヲ名テ外書ト曰フ。其ノ将ニ子孫ニ胎テ、以テ之ヲ玉函ニ秘セムトスル者数十種、亦之ヲ名テ内書ト曰フ。」「菅原道満（生田万）」「大壑平先生著撰書目序」と説明している。生田万の作成したこの書目自体、篤胤は内書が含まれているので、公表を控えさせた。⁽²³⁾

『悟道弁』と『出定笑語附録』はこの書目に掲載すらされていない。また、一部の門人にすら公開しない、内部的な記録としての意味しか持っていなかったのかもしれない。『出定笑語講本』は「出定笑語講積本 四冊」として掲載されており「外書」に分類されているが、出版にはいたっていない。

『印度藏志』は文政九年に草稿十冊あまりが成立し、うち二冊は清書まで至っている。天保五年「大壑平先生著撰書目」には「三十冊」と掲載されているが、その形態をみても門人への頒布を想定した書物ではなかつたようである。

篤胤の仏教関係書で最も早く出版されたのは『古今妖魅考』であった。これは文政四年に草稿が成立し、同十一年に清書が済んでいたが、弘化二年に篤胤没後の最初の気吹舎蔵板本として、鈴木重胤（一八一二—一六三）の援助を受けて出版された。²³

嘉永二年（一八四九）に大坂の坐摩社^{いかさり}が気吹舎に無断で『出定笑語』を木活字本の形態で出版した。これはやがて平田鏡胤らの知るところとなり、翌年に気吹舎が抗議して活版を回収し、出版は差し止めとなった。²⁴宮地正人は、篤胤・鏡胤は出版に際して、政治状況などを周到に判断し、書物の内容によっては出版を控えることがあったとし、『出定笑語』についても、この当時の気吹舎（平田家）は仏教批判を出版の形ではやりたくはないと判断したと論じている。²⁵ 仏教に対する批判を含んだ『古今妖魅考』は出版されていたものの、全面的な仏教批判を展開する『出定笑語講本』の出版は避けたと考えられる。ただし、写本での門人間への頒布はこのかぎりではない。²⁷

文久二年（一八六二）に、気吹舎は『出定笑語附録』と『悟道弁』を相次いで出版した。公武合体運動と尊皇攘夷派の活動が活発化し、島津久光の勅命を受けた政治行動が成功するなかで、気吹舎もまた自分たちをとりまく政治状況を判断しつつ、仏教批判書である二書の出版に踏み切ったと考えられる。なかでも日蓮宗と真宗を名指しして批判した『出定笑語附録』が版本の形で出版されたことの衝撃は大きかったようである。こののち、両宗からの強い反批判を喚起することとなる。ちなみに、『出定笑語講本』は近世を通じて出版にはいたらず、明治三年（一八七〇）にようやく出版された。

以上、やや煩瑣ながら篤胤の仏教関係書の成立過程について、講説／稿本作成／流布など具体的なプロセスに分節化しながら見てきた。現代において、篤胤の仏教批判としては最初に名あがる『出定笑語』（『出定笑語講本』）であるが、現在の知名度とはうらはらに、同時代的にはその読者は必ずしも多くなかったと考えられる。

三 反排仏書における平田国学批判と護法の論理

篤胤の仏教批判に対して、仏教者はどのような論理で反論したのだろうか。篤胤を主対象としたもの、篤胤に言及しているものをい

くつかとりあげて検討したい。

(一) 義導「篤胤駈」⁽²⁸⁾

著者の義導（一八〇五—八一）は真宗、近江国東本願寺派長照寺の学僧である。⁽²⁹⁾「篤胤駈」は篤胤『出定笑語附録』（文久二年刊）に対する反論書で、文久四年に成立し、写本の形で複数現存している。ここでは最も特徴的な点を二点だけあげておきたい。

義導は仏教と天皇・国家の結びつきについてつぎのように説明する。

王ハ三才ニ王タル者ヲ王者ト云。然ニ王共抔ト云ハ卑劣ノ甚キ也。殊ニ仏ハ御国ノ天子ノミナラス、神明権現ト云ヘトモ弘ク崇メ玉フ。列侯悉ク年々宗門改アリテ、仏ヲ尊信ヨト黎民ヘ告令玉フ。ソレヲ釈迦カドウシタカウシタナドト云ハ、篤胤コソ朝敵也、国敵也。儒者ヤ仏者カ異国人ニ按内シテ、日本ヲ攻タト云事モナキ事也。儒ノ道ハ忠孝ヲ主トス。真ノ儒道ヲ知タ者ハ己カ主君ニ忠ヲ尽ス。何ヲ以テ我国ノ主君ヲステ、異国ニ心ヲヨセンヤ。仏法ハナラサラ国家ノ思ヲ尽スヘシト諸経ニ説テアリ。尔ラハ何ソワカ国家ニ不忠ヲナスヘキニヤ。篤胤ハコンナ事ヲ云テ、日本ノ公武ニ排仏ヲ勸テ仏法ヲ滅亡セシメ、アトカラ異国ニ奪ハセントノ工夫ナリ。イヨイヨ異国ノマハシモノナル事明也。〔篤胤駈〕、三五九頁

仏教では「御国ノ天子」のみならず「神明」「権現」までも崇拜している。幕府・藩は毎年の宗門改を義務づけており、仏を尊信するように人々に命じている。そのような状況下、釈迦の批判を展開する篤胤こそ「朝敵」「国敵」である。また儒者や仏者が異国人の手引きをして日本を攻めさせたという過去はない。真の儒の道を知る者は自らの主君に忠を尽くす。篤胤のほうこそ、先に排仏を進めて仏法を滅亡させ、その後に異国にわが国を奪わせようとする、「異国ノマハシモノ」である。このように批判する。

ここでは、自らの宗門ばかりでなく、仏教一般、そして儒学までも主君に忠を尽くすという点で一致するとしており、諸教一致的姿勢が明白である。この視点からすれば、篤胤はその姿勢を共有しない者である。

また、篤胤が仏教批判に際して文献考証的な手法を用いていることに対しては、真宗の学問に対する自負・自信を対置している。

一二真宗ニ学者多シトハ、凡ソ本邦ニ於テ三道ニ学者アリトイヘトモ真宗ニ及フモノナシ。ソノユヘハ国学者ナラハ国学ニノミ工夫シテ、仏法ノ事ハ夢ニモシラス、儒道モシラス御国ノ神明ノ本意ヲモシラテ、コチツケ学問ニシテ、典拠モナキ僻解ヲナシ臆度ヲ師トスル分齊也。儒者ハ経書史伝ヲヨミ、詩文ニ耽リ、書画ヲ事トシ、悪筆ヲ揮テ氣象トカ見識トカ申シテ售テ金錢ヲ収ル売儒ノミニテ、仏神ノ利験ヲ以怪力乱神抔ト嘲ル。是皆仏理ニ暗ク神学ヲシラサルユヘ也。諸宗モタタ己カ宗体ノ学問ノミニテ、佗宗外典ニ涉獵セルモノハ鮮也。然ニ真宗ハ内典外典ニ亘リ博ク群籍ヲ貫練シ、天文地理顕密教禪大小権実スヘテ一切法門研究セサルハナシ。故ニ大法主ヨリ貫練堂ノ三字ヲ賜リ、毎年不欠ニ諸国ヨリ馳集リ、春夏秋冬ヲエラハス苦学練磨ス。別シテ夏中ニハ法主ノ芳命ヲ奉シテ講説アリ。春秋亦コレニ准ス。故ニ学者甚多シ。然ニ篤胤タタ己カ辺土ノ雛僧ヲ知テ、京兆大講堂ニ於テ数万ノ大衆精学スルヲシラサルハ可笑也。〔篤胤駆〕、三六〇頁

国学者は国学ばかりをやっているので仏法や儒道を知らず、「御国ノ神明ノ本意」も知らないでこじつけの学問をしている。他の仏教諸宗や儒者と異なり、真宗では内外の書物を博搜して学問にいそしんでいる。しかも、それは組織的に行われている。このように述べて、篤胤の学問の不十分さ、稚拙さを批判するのである。

(二) 龍温「総斥排仏」⁽³⁰⁾

龍温（一八〇〇—一八五）は、東本願寺の学場で講師職をつとめた同派京都円光寺の僧侶である。「総斥排仏弁」は慶応年間前後に成立したと考えられている。同書は排仏論のうち儒者によるものと国学者によるものを主対象として、それに反論を加えている。⁽³¹⁾

龍温は冒頭に近い部分で仏教の敵をつぎの四種と定義する。「凡仏教西天ニ起リテ、漢土、吾朝ト弘伝スルニ於テ、障害トナル邪計大ニ四種アリ。一ハ、地球円体ヲ建ル天門家、二ハ、辺海入港耶蘇徒、三ハ、局見排仏ノ儒者、四、臆説ヲ張皇スル神道者。今日眼前

ニ吾仏法ヲ仇ノ如ク視ルハ、此四類ニスギズ。」「（総斥排仏弁）、一〇八頁」。龍温は「急策文」（文久三年）では、仏教の敵を「今や四方ノ敵ト称スルモノハ何ゾ。一ニハ僻見ヲ逞ウシテ仏法ヲ詆排スル儒者輩、二ニハ神藏諸部ノ古書ヲ用イズ臆説ヲ張テ却ツテ古道古伝ト称スル神学者、三ニハ地球円体ニシテ行星也ト譚ズル天文者、四ニハ辺海入港ノ耶蘇教徒、コレ也。」としているが、ここでいう「神藏諸部ノ古書」とは、寺院の藏書などに見られる神書（神祇関係書）を指すと考えられる。特に国学等でとりあげられない仏教系の神書を意識しているのではないだろうか。義導同様、ここでも仏教者が、永年にわたって書物を蓄積してそれを学んできた自分たちの学問伝統に自負を持っている様子がうかがえる。僧侶は寺院における学問において神道書についての学習も行ってきたのであり、そういう実績を無視している点においても国学者は批判対象となる。

龍温の眼には、篤胤の存在が仏教にとつての脅威と映った。それは著作の内容というよりも、その影響力の大きさにおいてである。

サテ、彼ノ本居ノ門人数多アル中、秋田ヨリ出タル平田篤胤ト云者、ソノ著述ハ本居ヨリモ多シ。儒ヲ排シ、仏ヲ排シ、「古来ノ神道ハミナ仏法ガマジル。僧ニ欺レタル神道ナリ」ト云テ、俗神道ト名ケテ、ミナコトゴトクコレヲ破ス。彼者作レル教部ノ中、傍ラ仏法ヲ詈ル言ナキモノナシ。別シテ排仏ノ為ニ作タルモノ、印土藏志二十卷余アリ（未脱草稿トアリ）。次ニ、出定笑語四卷、悟道弁二卷、妖魅考三卷、釈氏根源記二卷、コレラハ皆仏法ノ悪口ナリ。又儒ヲ破シタルモノハ、西籍概論四卷、鬼神新論二卷。又神道モサンザンニ破スル。俗神道大意四卷、古道大意二卷、伊吹於呂志二卷等ニ、傍ラ往々ニ仏法ヲ詈ラザルハナシ。此頃開板トナリタルガ、出定笑語附録三卷、初ノ一卷ハ総ジテ仏法ノ悪口、後ノ二卷ヲ、一名ハ神敵二宗論ト名ケテ、我真宗ヲ日蓮ト一ツ組ニシテ、神ノ敵也ト、ソノ悪口雜言、ミルニ忍ザル者也。然ルニ驚クベキコトハ、コノ平田ガ作ノ悪口雜言ガ大ニ名高キコト、ナリ、此頃仏法ヲ嫌フモノ、武士・医家ノタグヒ迄、ミナ求メテ喜デ讀ムト申スコト也。実ニ大息スベキ此頃也。凡、古来排仏ノ書類モ世ニ多シトイヘドモ、此篤胤ノ作ノ如キモノ古来ナキコト也。上来列ネタル処ノ排仏ノ書類ノ中、或ハ大息シ、或ハ腸ヲ断ツベキモノハ、儒者ニアリテハ、出定後語・草茅危言、サテ今日ニアリテハ、彼經濟問答秘録ナリ。神道者ニアリテハ、此ノ篤胤ガ作。如是書類、道路ニ溢ルガ如クナルヲ知ラズ。開キ見ヌト云相タニテハ、今時末代ノ仏法ヲ護持スル沙門釈氏ト云ベカラズ。

心アル人ハ実ニ驚カズンバアルベカラズ。コレヨリ後、何ナル者出ルモ計リ難シ。又海内ノ広キ、見尽スコト能ハザレドモ、今私ノ管見スル処ヲ挙テ、近来排仏家ノ大略ヲ知ルベキコトノソノ方隅ヲ示シ置クコトナリ。「龍温「総斥排仏弁」、一一八―一九頁」篤胤自身が神道、仏教について著した書物の多さに驚くとともに、それらに対する世の中の評価が高く、「此頃仏法ヲ嫌フモノ、武士・医家ノタグヒ迄、ミナ求メテ喜デ読ム」という現状を大いに嘆いている。この流行ぶりを支えているのは気吹舎の組織、そして出版活動である。

サテ次ニ、近来此頃ノ吾国ノ排仏家、先ニ列ネタル人名・書名甚ダ多キ中、今日最恐ルベキハ、平田篤胤ガ作り出ス悪口。本ヨリ行ハレネバ恐ル、コトハナケネドモ、行ル、故也。彼ノ篤胤ハ、秋田ニテ死シテ十五六年ニナリタレドモ、ソノ子孫・弟子アリテ、追々開板スル。「龍温「総斥排仏弁」、一二六頁」

龍温は、篤胤が亡くなって十五、十六年経つにも関わらず、子孫や弟子がいて彼の排仏論がつぎつぎ出版されると述べる。時代が下るにしたがって気吹舎の門人組織が拡大し、出版活動も活発になってきている。すでにみたように、文久二年に『出定笑語附録』が出版されて、気吹舎による仏教批判が公然化した。龍温はその状況に脅威を感じているのである。

(三) 満成「僻問即答記」

満成は浄土宗の僧侶である。彼の属した館林藩善導寺は浄土宗関東十八檀林の一つで、近世の浄土宗の学問における重要な拠点のひとつだった。本書「僻問即答記」(写本、上下二冊)は王政復古後の慶応四年六月に「同書下巻、末尾」、同附録は明治二年七月に成立した「僻問即答記」附録一席談、明治二年七月十五日成立・その後加筆、一丁ウ三丁オ」。國學院大學蔵「宮地直一コレクシヨン」(神道学者宮地直一の個人旧蔵書)に収められている。

「僻問即答記」附録一席談にはある僧と満成の会話の場面が収められている。その僧は、前年に満成の寺を訪問したときに「僻問即答記」を読んで納得し、寺に戻ったあとにある人にその内容を話したところ、その人はその書物に登場する聞き手は「神学」がないため満成に説得されたが、「近来ハ次々ニ伊吹ノ屋ノ著サレタル書籍ノ隆リニ行ハレテ其学流興盛」なれば、それを学んだ人たちとの問答は際限なくなってしまう、篤胤は「神儒仏ノ三道」の書をよく学んだうえで仏道を破っているので「天朝ニモ御用ヒアリ」との風聞があるという。僧侶はこれが事実であれば仏法は破滅してしまう、と嘆いて満成に事情を知らせた。

これに対して満成は、天皇（「天子」）は公正であるのでそのようなことはない、と述べる。その理由として「去ル二月ノ 勅命ニテ、真宗伝燈弘通セヨ、 宝祚無疆ヲ祈レトテ、我等ガ十八檀林へ、下シ賜ヒシ薄墨ノ、 綸旨ヲ既ニ頂戴シタリ。」という事実を述べる。これは、明治二年（一八六九）一月に浄土宗関東十八檀林が勅願所とされた事実を指している。満成にとって、天皇の勅命によって「宝祚無疆」を祈願することが、浄土宗の国家における正統性を支えているのである。

公儀の命によって国家安泰の祈禱を行うというのは、近世の一部の有力な寺社にとって一般的な行為であって、近世の幕藩制国家のなかにこれらの寺社を位置づけるものであった。³³⁾ 明治維新によって、神道を重視した復古的政策が採用されて仏教・寺院のこれまでの地位が動揺するなかで、天皇・国家との結びつきは、近世のモデルであった国家安泰の祈禱に求められた。

神祇と仏教の結びつきについても、日本の「古書」には神託をはじめとして神の事蹟には仏教と「冥合」するものも少なくないとする。それに対して、国学者が記す「近來著述ノ和籍」は儒仏が渡来する以前の「古言ノ端」だけから推測して「我執ノ俛」に儒仏を批判し、自分の流派以外の神道まで罵って「古学」と称して一派一宗を立てようとしており、さらには、「皇国ノ道」を立てるといって、もともと「皇国ノ道」であってこれまで世にいきわたっていた「三道」を批判するのはわがままでしかない、と批判する。これまでふれた仏教者と同じく、ここでも諸教一致が前提とされ、そこから国学者の「偏狭さ」が批判されている。

諸教一致的な姿勢は他の箇所でもたびたび示される。たとえば、本居宣長の歌を引きながらつぎのようにも説明する。

更ニ神儒ヲ引テ仏ニ入ル、ニ非ズ、元來諸法皆仏法ニアラザルハナシ、余道ノ者ガ仏法ニ非ズト思フ事ハ室内ニ在ル虫ノ室内ナル

事ヲ知ラザルガ如シ、本居ガ神道ヲ立ントスル見識ニテスラ、次上分註ニ引ク歌ノ如ク、釈迦孔子モ神ナレハ皇国ノ神ノ道ニ非ザルハナシト云意ニテ、万国是レニ漏ル、ハ有ベカラズ、然則神即仏、々即神ニシテ儒教モ亦神仏ニ道ニ不肖、世教第一ノ法ナリ、但本居ハ此意ニハアラス「僻問即答記」上、十八丁オ」

ここでは、神儒仏一致と、それに立脚して仏教の普遍性と優位が主張される。

このほか個別の論点に関しても、神代文字の存否をめぐる議論や篤胤が仏教を否定してしながら輪廻転生を認めている点の批判など興味ぶかい点は少なくないが、ここでは立ち入らないこととしたい。

おわりに

以上、篤胤の仏教批判とそれに対する反批判について、テキストと書物の区別とその間に存在した諸活動に注意しながら検討した。

篤胤は、対外的な危機状況を契機としてそれを強く意識しつつ、日本の国家を仏教以前の典拠から神話的に基礎づけようとした。それは国土自体を神話のなかに位置づけるものであり、従来の仏教的な国家・国土の理解に対立するものであった。

篤胤の仏教批判は、当初かぎられた人々を対象に講説の形でことばにされたものであった。気吹舎の組織拡大と出版活動が活発化するなかで、その仏教批判のことばはやがて書物になるが、そのプロセスには政治的配慮をはじめとしてさまざまな要素が作用していた。

朝廷と幕府を軸とした政治的諸勢力の葛藤のなかで、それまで気吹舎の仏教批判が文久年間の『出定笑語附録』の出版によって、多くの人に知られ、多くの読者を獲得した。それは現実社会において、気吹舎が仏教に敵対する勢力として広く認知されたことを意味した。

篤胤の仏教批判に対する仏教からの反批判にはいくつかの共通点がみられる。ひとつは儒学や神道を含めた諸教一致の立場に立っていることである。それは、近世仏教が民衆との接点を求めるなかで形成していった思想的立場であり、平田国学はこの立場とは相容れ

ない存在として仏教者には認知された。

幕藩制のなかでの仏教という視点でいえば、ひとつには寺請制が、国家における仏教およびその信仰の正当性を支えていた。また、浄土宗などをはじめ、国家安泰のための祈禱は、国家における仏教の正統性を担保するものであった。

仏教者にある程度共通しているのは、自分たちの学問伝統に対する自信であって、日本の神祇についての知識についてもそのような文脈のなかでの自負をもっていた。この点から国学は歴史が浅く視野の狭い学問として批判された。

幕藩制国家が終焉を迎えようとするその時期、日本宗教は国家をどのようにとらえていたのか。平田国学は、『古事記』や『日本書紀』、祝詞など、日本古来と考える典拠から国家を基礎づけようとした。当事者にとって「復古」と認識されたそれは、歴史的にみれば新しく生じてきた動きであった。他方、その批判にさらされた仏教が反批判において示す国家理解は、中世に端を発し近世を通じて充実させてきたもので、近世社会における制度的基礎のうえに考えられたものであった。しかしながら、このような両者をとりまく政治的・社会的環境も維新後には大きく変容し、国家との関係もまた否応なく変化していくのであった。

注

- (1) 本論文は、二〇〇九年三月二十二（二十五）日にケンブリッジ大学セルウィンカレッジで開催された研究会議Tokugawa Conferenceにおいて行った同名の発表とその原稿にもとづくものであり、加筆・修正は最小限にとどめた。この研究会議は、江戸時代の思想・宗教・文化についてさまざまな視点からの発表にもとづき検討をするというものであった。貴重な発表の機会を設けて下さったリチャード・パウリング先生に感謝したい。
- (2) 気吹舎の出版活動については、吉田麻子『知の共鳴―平田篤胤をめぐる書物の社会史―』ペリカン社、二〇一二年が包括的に解明している。
- (3) ロジェ・シャルチエ「読者共同体」『書物の秩序』長谷川輝夫訳、文化科学高等研究院、一九九三年（原著、一九九二年）、三十五―三十七頁。
- (4) 宮地正人「伊吹迺舎と四千の門弟たち」（『別冊太陽 知のネットワークの先覚者 平田篤胤』平凡社、二〇〇四年）。
- (5) 村岡典嗣「平田篤胤の神学に於ける耶蘇教の影響」『増訂 日本思想史研究』岩波書店、一九四〇年（初出、一九二〇年）。

(6) 宮地前掲「伊吹迺舎と四千の門弟たち」、一〇五頁。

(7) 以下、『靈能真柱』については、真菅乃屋藏版『靈能真柱』（東京大学本居文庫蔵）によつてゐる。その読解については、國學院大學研究開發推進機構日本文化研究所「国学研究会」での議論を参照してゐる。

(8) 『靈能真柱』で篤胤は、玉を飾ることの由縁について次のように述べる。

「二柱神に、諸々天ツ神の賜へりし瓊矛といふは、玉銚と云ふ如く、玉もて飾れる矛なるべしと師のいはれたるが如し。(中略) さて、その玉を飾れることは、妙なる由あり。其は五柱の天ツ神ことには産靈の御靈を、二柱の神に幸ひ依し賜ひ、国土を功しみ成させ賜はむとて、其御靈の祝の飾に飾りたまへる物なり。(中略) 但し此は、瓊を飾れる謂由なるを、その御矛に賜へることは、この矛を以て浮雲なす堅まりざりし青海原を画成し衝立て、中心の固柱とせよとの御量なるべし。然在ればこそ二柱の神の、画探り賜ひて、自然に凝成れる、淤能碁呂島に衝立て、國中の御柱とは為賜へるなれ。然在ば、この大地の中心は、この賜し、御矛の銚になも有りける。【割注】如此て、その柄の方は、小山となれるなり、】かの、天となるべき物は萌上り去り、泉となるべき物は垂下り、その中間に残りて、大地となるべき物の、なほふはふはとして、固まらざりしが、この御矛の衝立賜へるによりて、締り固りつるなり。天ツ神の賜はるべき物も多在む中に、矛を賜へること、甚も妙なる、深き理のなくてあらめや。(中略) ければ、この大地の広大なる中に皇ら御国はこれ国土の元本、また淤能碁呂島は、この大地の固たる、御柱たる地になむ有ける。(中略) うべ、皇大御国の地勢の堅固く、また生れ出る人も何も、万ノ国に卓越たることを、熟思ふべし、よく考ふべし。」「『靈能真柱』上、第五回、十五丁ウー十七丁オ」

そして、玉の意味を次のように説明してゐる。

「さて、天照大御神は、伊邪那岐大神の、梶賢木、伊豆の御靈に生坐て、その大御のいみじく光華明彩く、天地の裡に照徹坐し、故に、父大御神の御心に、天の清明かる御国には、相応くおもほし、かば、その君とは定め賜へるなるべし。(中略) その御頸珠を賜へることは、伊邪那岐大神、既に国は生竟たまひて、その国土に幸ひ坐すべき神々をも生給ひ、生の御終にこの大御神を生たまへれば、その御功を立ぬることを歎坐て、是より以後は、世に靈幸ひたまふべき御功德を、悉に大御神に禪賜ふ御靈に、その御頸珠をば給へばなるべし。(中略) その玉緒瑯々に、取振かして給へるは、大御神の御寿を長く天足し賜へと、祝坐ての御事なり。(中略) すべて、古に珠を帶たるを、たゞ何となき飾りとのみ思ふは、いまだ委しからず、

- 此は寿命真幸くと、祝の飾りに帯たるものになむ。(中略)【割注】上の件のこと、をも思ふにも、伊邪那岐命の、大御神に、御頸珠を賜へることは、その御魂の幸を、悉に禪たまはむとの御所為なることをささるべく、又天つ神の、二柱の神に瓊矛を給へるも、また大国主神の、須佐之男大神の、天之沼琴を取て逃還まし、も、悉にこの謂によることなり。(中略) ……それは物のみならず人の魂も、神の賦賜へる物なる故に、多麻とは云ふなり。神の幸ひの漸に加ゆくを、みたまのふゆといふにても、この義の言なることを知るべし。】『霊能真柱』上、第八回、四十二丁オ―四十二丁オ「古史」のこの箇所解釈に関連して、山下久夫は、『古史伝』における天瓊戈論・淤能基呂嶋論について、篤胤の神話的思考という観点からテキストの詳細な分析を行っている(山下久夫「篤胤における神話的空間の幻出―『古史伝』の天瓊戈論・淤能基呂嶋論を手がかりに―」(『金沢学院大学紀要文学・美術・社会学編』七、二〇〇九年)。
- (9) 遠藤は、二〇〇九年の発表ののち、「平田国学と幽冥思想」『日本人と宗教 三生と死』(春秋社、二〇一五年)において、この点の説明を行った。あわせて参照されたい。
- (10) 平田篤胤『出定笑語講本』(『新修平田篤胤全集』七、名著出版)、三四七―三四八頁。
- (11) 平田篤胤『古今妖魅考』(『新修平田篤胤全集』九、一九七六年、所収)。
- (12) 平田篤胤『印度歳志』(『新修平田篤胤全集』十一、一九七七年、所収)。
- (13) 菅野博史「平田篤胤の『印度歳志』と仏教研究の意義」『大倉山論集』三七、一九九五年、五四頁。
- (14) 遠藤潤『平田国学と近世社会』ペリかん社、二〇〇八年、一〇九―一一九頁。
- (15) 「誓詞帳」と「門人姓名録」には諸本があるが、ここではともに『新修平田篤胤全集』別巻、一九八一年、所収の「誓詞帳」(底本は現在、国立歴史民俗博物館蔵)、「門人姓名録」(底本は無窮会図書館神習文庫蔵)に依拠している。
- (16) 芳賀登「平田篤胤の仏教批判―とくに神敵二宗批判を中心に―」、芳賀幸四郎先生古稀記念論文集編集委員会編『日本文化史研究』、一九八〇年、二六七頁。
- (17) 大桑斉「仏教思想論―諸教一致論の形成―」、本郷隆盛・深谷克己編『講座日本近世史九 近世思想論』有斐閣、一九八一年。
- (18) 山口啓二『鎖国と開国』岩波書店、一九九三年、一九二―一九九頁。

- (19) 日塔和彦「『御府内寺社備考』からみた江戸の寺院」『年報都市史研究』六、一九九八年。
- (20) 北村行遠は、近世堀之内妙法寺の諸行事に参加した日蓮宗の三九九講についての事例分析を行い、以下の結論を導いた（北村行遠『近世開帳の研究』名著出版、一九八九年、九三―九四頁）。
- (一) 日蓮宗の江戸講中はほぼ江戸の各地に存在し、それぞれの講の結成された地名（町名）を冠して講活動を展開しており、そのなかでは日本橋、京橋方面という商人や庶民の密集していた地域に比較的多くの講が存在していた。
- (二) 江戸における日蓮宗の講中の活動は、十七世紀中頃からみられるようになり、十八世紀の半ばには講中が積極的に寺院の行事に参加しており、それとともに講数も次第に増加をみせていき、講数は十九世紀前半にその最盛期をみせていた。
- (三) 講中の実数を把握することは困難であるが、ここでは少なくとも約四〇〇以上の講が江戸時代全体で江戸に存在していたことを確認した。講の消長もあるので常に四〇〇以上の講が存在していたわけではないが、講の最盛期に実施された身延山久遠寺の江戸出開帳に一四四の講の参加をみたことからすれば、最盛期に約二〇〇ぐらいの講が江戸に存在していたのではないかと考えられる。
- (四) これらの講は、妙法寺の行事に対する講中の参加の実態からも知られるように、日蓮宗寺院の行事のすべてに参加していたのではなく、それぞれの講の設立目的や地域性をみせながら自主的に寺院行事に参加していたといえる。
- (21) 高木豊「平田篤胤の日蓮宗批判の素材」『新修平田篤胤全集月報』三、一九七七年。
- (22) 吉田前掲『知の共鳴』。
- (23) 谷省吾「平田篤胤の著述目録―研究と覆刻―」皇學館大學出版部、一九七六年、四三―四四頁、二五頁。
- (24) 吉田麻子「平田篤胤『古今妖魅考』の出版事情」（『書物・出版と社会変容』一、二〇〇六年（のち吉田前掲『知の共鳴』に所収）。
- (25) この経緯については、遠藤「幕末社会と宗教的復古運動―白川家と平田国学 古川躬行を接点として―」『國學院大學日本文化研究所紀要』八三、一九九九年（のち遠藤前掲『平田国学と近世社会』所収）で論じた。
- (26) 宮地前掲「伊吹迺舎と四千の門弟たち」、一一一頁。
- (27) 『出定笑語』の写本形態での頒布については、中川和明「平田篤胤の『出定笑語』の諸本」『鈴屋学会報』二〇、二〇〇四年で論じられている。

- (28) 柏原祐泉編『真宗史料集成 十法論と庶民教化』同朋舎、一九七八年、所収。以下、引用は同書の頁を示す。
- (29) 柏原祐泉「解題」、前掲『真宗史料集成 十法論と庶民教化』。
- (30) 『日本思想大系 五十七 近世仏教の思想』岩波書店、一九七三年、所収。以下、引用は同書の頁を示す。
- (31) 前掲『日本思想大系 五十七 近世仏教の思想』、一〇五頁。
- (32) 小林志保・栗山義久「排耶書『護国新論』、『耶穌教の無道理』にみる真宗本願寺派の排耶運動」『南山大学図書館紀要』七、二〇〇一年。
- (33) 神社における国家安泰の祈禱については、松本久史「近世朝廷における祈禱の意義―七社祈禱を中心に―」『国史学』一九五、二〇〇八年などを参照。